

長野明子（2005年度日本英語学会新人賞 佳作）

このたびは拙論文 “The Status of Back-Formation and Morpheme-Basedness of English Morphology.” に対し、日本英語学会新人賞佳作をいただき、誠にありがとうございました。学部以来ご指導くださった津田塾大学英語学コースの先生方、レキシコン研究会の皆さま、新人賞選考委員の先生方、お名前は挙げられませんが、ご指導くださった先生方、貴重なコメントやご指摘を下さった方々に心よりお礼申し上げます。

この論文のことを思うとき、まず心に浮かぶのは、元になった大学院の授業のタームペーパーを書いていた時に感じたワクワク感です。学部で島村礼子教授の「形態論特殊講義」の授業を受けて以来、形態論・語形成分野に強い興味を感じて英語学の世界に飛び込んだ私は、修士論文で転換 (Conversion) と呼ばれる現象をとりあげました。英語の転換では動詞を作るタイプが最も生産的ですから、興味は自然に動詞派生へとつながり、そこで出会ったのが逆形成 (Back-formation) と呼ばれる現象でした。例を集め、OEDなどの辞書の意味記述を読んでいると、なぜか転換動詞の意味記述に似ています。もしかすると、逆形成は転換の一種として扱うことができるのではないか？ その直感がこの論文の始まりでした。一旦そう仮説を立ててみると先行研究で言われていることが新たな意味を帯び、ストーリーを作っていく楽しさに夢中になってしまいました。

勢いのままに書いたタームペーパーは、その後、指導教官の島村礼子教授、授業担当の池内正幸教授に読んでいただいたり、レキシコン研究会や東京言語学研究会の例会、日本言語学会の年次大会で発表させていただいたりして、次第に論文の体を成していきました。突拍子もないことを主張するとお叱りを受けるかもしれませんが、このようにして出来上がった論文が評価されましたことを、大変嬉しくまた光栄に思っております。英語学の世界は奥深く、研究の果てしなさに圧倒されますが、今回のことを励みに、地道に勉強をつづけていきたいと思っております。今後ともご指導のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。